

「高校倫理哲学だからできること」

塩川千夏（成蹊中学・高等学校）

私は今回のワークショップで唯一の高校の人間ですが、未来志向の提題が続いた後で、単に今の学校の条件下の授業例などをするのは、バランスの悪いことです。私としては、高校の教育環境や教科「倫理」の特質からその条件のどこを生かせるか、またどういう改善が必要なのかということを考えたいです。

日頃、高校生に接しているものとして、哲学教育の可能性をどう考えるか。今回は、前の二つの提題をふまえて、ひろい意味での対話性ということに着目してみます。広い意味での対話性には、河野先生のご提題に含まれるような、生徒の活動を中心とし生徒同士の議論を通して、公民的資質を育てるということも含まれますが、また木阪先生のご提題にあったように、あるテーマをめぐる文化圏を超えた思想的対話ということも含めて考えたいからです。異なる思想・考えが出会い、何かがおこる、そのいわば哲学的現場は、高校生の生活と学びの場である学校で、どのように構想、イメージできるのでしょうか。

哲学教育における対話性の諸相を、まずごく具体的に考えていきたいと思います。その後で、高校という磁場で哲学分野が何をなすうるか、考えたいと思います。例にあげるのは、源流思想の定番ソクラテス、対話教育の元祖ともいえる「哲学者」を高校生に紹介し、彼等自身の生活と思考の空間にひきこむプロセスです。（とはいえ私は特別、対話教育をしているわけではないので、教育方法の話をするわけではなく、あくまで対話性について考えるための材料です）古代ギリシャといわれても、必修世界史を近代から扱う学校もあり、イメージさえ持ちにくかったりします。そこで資料 1 のように導入としてソクラテスの生き方と主張の説明に加えて、マンガでのソクラテスイメージも提示しておく、生徒も話に入りやすい。実はこの資料の作品は、時空をこえてさまざまな時代や場所に現れる「不思議な少年」を狂言まわしにして、多様な人間ドラマのひとコマを切り取るといった設定なのですが、「ソクラテス」という章は、死刑を待つソクラテスが一時現代につれてこられ、ソクラテス的対話の現在性にふれるというプロットです。少々ナイーブなところもある話しですが、作者はよく勉強して書いたなという内容で、あとで生徒にやらせよう課題の下敷きにもなります。その上で資料 2 のように対話篇のテキストを、これは『ラケス』ですが、役割をふって生徒に読んでもらう。生徒に、にわか「ソクラテス」や「將軍」になってもらって、その「演技」をクラスで楽しむことで、生徒が身をおいて思考できるイメージ空間をひらくのです。講義でソクラテスの思考の方向をある程度見定めた上で、こんどは課題として、現代にやってきたソクラテス、という設定で対話を自由に考えさせ、レポートや試験の

記述をよく書かせています。課題の条件として、「やさしい」「正しい」「頭が良い」など価値にかかわるテーマについて展開する、対話がソクラテス的であることを重視する、ということを示します。事前に対話編のパロディで関心をひいてもらうこともあります。次の資料4、5が生徒の考えた現代の「対話篇」です。面白い例をあげましたが「高校生裕二とソクラテスの＜頭がいいとはどういうことか＞をめぐる対話」「教育ママと太郎とソクラテスの三者面談」「ソクラテス気取りの学生とおばあさんの＜親切＞についての対話」「もののけ姫とソクラテスとの自然破壊をめぐる対話」など、ちょっとこちらには思いつかないものもあります。彼等の生活空間にソクラテスがやってきたわけです。彼らの設定に応じて、ソクラテスは学校教員のようにであったり、アニメの登場人物となったり、「ソクラテス気取りの学生」となると完全にまがいものですが、でもなにがしか「ソクラテス的なもの」がとらえられています。ここでソクラテスは歴史上の人物ではなく、なかば理念化された存在であり、プロットによって、少しずつアレンジを変えて登場しているわけです。この「ソクラテスもどき」の登場によって（もどきという自覚が必要と思いますが）、日常的な言葉に埋め込まれた価値観に反省がくわえられ、臆見的理解の転換が行われたり、無知の知においこまれたりというのが、話しをつくるパターンです。レポートは論理展開に飛躍や無理があったり、定義自体がちがうだろうというものもありますが、日常的思考を異化しようとする努力が認められます。話題の展開が苦しくなっているところこそ、実は生徒自身が無知というか、ある限界に直面しているところといえるでしょう。

資料6は次の段階で、フィクションの対話ではなく、二人の仲の良い女子高校生が、ソクラテスの現代的意義について話し合ったことを対談形式で書いてもらったものです。「現代に対するソクラテス的批判」について意見交換することで、（議論として深めるところまではいっていないにせよ）、互いに刺激し合い、思考が活性化されていることがうかがわれます。ソクラテス的なものと現代という時代をこえた対話が、友人同士のいわば横軸の対話によって触発された例でしょう。これは仲がよく、レベルの似通った幸運な場面でおきていることで、学年8クラス300人みなに課題として出すことは、無理があります。しかし好きな友人と話し合うことも認めた上で、個々人に「対話形式のレポート」を書かせることも可能かもしれません。しかし、よい対話相手に恵まれなかったとしても、自分ひとりで、異なる考え方を対話風にはきつつ考えるような作業をしてもらったとしても、その対話には固有の意味があるといえます。それは思考そのものがもつ自己自身との対話の表現といえるからです。自らの中に複数の観点をもってものごとを吟味する対話性なしに、そもそも思考は展開しないでしょう。プラトンも思考（ディアノイア）は魂自身を相手に行われる対話（ディアロゴス）ではないか（『ソピステス』263E）と言っていたように。

さて、いままで挙げた例から、哲学教育における対話の諸相について整理したいと思います。

1 思考自体における自己内対話：

2 生身の相手との対話：

3 異なる文化的歴史的背景をもった思想との対話：

この三つは別にプロセスになっているわけではなく相互に関連しているといえます。

まず1の自己内対話は、コミュニケーションとしての対話性以前の、思考が思考であるための対話性といえませんが、実際の具体的対話の積み重ねによって、深めひろげることができる、だからこそ、教育による「自己形成」(Bildung)とか教養ということが可能となるのでしょうか。他方、内省的自己対話によって、現実の相手との対話が深まることを考えれば、自己対話は決して自己完結し、閉じたものではないでしょう。

2の生身の相手との対話は、さしあたり、哲学教育の枠内で考えますが、対話的教育についていえば、もっととりいれる余地があると考えています。生身の相手からただ教わるだけではなく、自分で問い、答えてみる機会がふえることは、効果的です。勤務校では、質問にくる生徒は結構多いのですが、少人数で質問にきた生徒たちが、質問したりされたりしているうちに、話しもひろがり、理解や興味の度合いが非常に高まること、やりとりの中でピントも合い、中程度の力の生徒も結構むずかしいことを理解することが認められます。少人数が効果的な教科といえます。また生徒同士で話しをすることでも、異なる思考が喚起されるし、理解のおそい者は、話の流れの見当をつけるようになり、議論に優れたものは、自分の考えを明確化することができる。ただグループによる意欲や力のかたよりの、複雑な人間関係を考えると、フォロー体制が重要で、できれば少人数のクラスで、ひとりひとりの話をよくキャッチし、議論の流れを支えられる教員がつくことが必要と思われます。うちのように5クラス200人の高三生を担当し、推薦など成績が進学に直結して、かなり点数を意識した生徒が含まれる環境は、対話中心で全体を組み立てる授業には向いていないでしょう。どの学校でも一律に導入していいというものではなく、効果的実施のための配慮、環境整備が重要と思います。

3は、思想史や過去の思想がきちんと学ばれた場合、なされるべき対話であり、それを通して過去の思想は現在の思考や議論のトポス、論点発見の貯蔵庫として生かしようといえます。哲学は抽象的なればこそ、せまい文脈をこえて意味をもちうる。たとえ二千年以上の時代の隔たりがあつたとしても、当時の具体的状況・文脈をこえて、新しい文脈の中でよみがえる。それは高校生に対しても、むろんごく入門的な段階ではあれ、ある程度示すことはできるでしょう。たんなる知識注入にしないためには、思想を対話的磁場の中におき、生きたものにする工夫が大事でしょう。そこで木阪先生の教材のご提案のような、哲学史の内容を、時代をこえた思想間の対話として編集し、仕立て直す企画は、多領域、他分野にわたる教科「倫理」の多様性を逆に生かす道として、興味深いものと思います。各分野の研究者の知恵を集めた教材があれば、忙殺される現場の教員にとっては助かるものでしょう。ただ、授業担当者は、そうした教材を、さらに、生徒の関心を喚起し、生徒にとっての「いま」にひきよせる導入のために、もう一段階の工夫がいる

かもしれません。そこは、生徒の学校生活全般にかかわっている現場教員として、生徒にとってのリアルを探りつつ、材料を加えることができるでしょう。ドラマ、コミックなどのイメージもまた、授業を活性化させる教材として無視できません。日本で発達した思春期文化としてのサブカルチャーには人文的知識や問題意識の断片と、子供たちの関心との接点が見いだせたりするものです。ソクラテスを現代につれてきた「不思議な少年」のように、イメージの力が、文脈をこえ、具体的状況と抽象的理念を媒介する思想的対話を可能にすることでしょう。

以上の対話性はそれぞれの仕方で「文脈を超える力」にかかわっており、教授法によって強調点が変わるとしても、その連関が意識されることが望ましいといえます。思考力、対話力、論点発見を支える知的貯蔵庫の形成が、総合的に促進されれば、その後の勉学のためにも、社会の様々な分野の活動のためにも、資するところが大きいでしょう。いずれにせよ暗記中心という印象をもたれている「倫理」の科目像からの転換は必要です。教材、指導法の開発、ふさわしい教育環境の整備が求められていると思います。思考することを教える、というのは古くからある哲学教育の目標ですが、現代の高校において、どのような形で可能なのか、高校の教育環境はどう生かせるのか。具体化はしきれないのですが、将来につながりそうな点を挙げてみたいと思います。

最初に科目「倫理」を含む教科教育の、高校の指導の中での位置を、簡単に図式化してみます。

(パワーポイントのスライド5) まず生徒にとって学校は生活空間です。学校生活全般について教師がかかわるのが中等教育であり、教科教育はその一コマです。そしてその指導全体を通して、進路や、社会的自立に方向づけられています。そこでこれから生活指導面、教科教育、進路という三つの側面から考えていきたいと思います。

1 生活指導-理性的対話を学ぶ場

生活指導面についていえば、その重みが近年ますます増していると、実感しています。対話、議論といえば、クラブやクラスの中でこそ、授業やその課題の人工的な空間とは異なる意味で、生徒にとって切実かつ真剣な話し合いが行われ(ときに学園ドラマのようなパトス的な場面にも巻き込まれますが)異なる意見をもち、激しい感情を抱いたものたちが、どうやって事をおさめ、共同体を維持するか、一人一人がどう語り、どう動けばよいのか、そうした経験が、大学や職場での議論や説得の能力にもつながっていきます。国語や社会の教科は、そうした経験をふりかえり、パトスをロゴスの次元につなぐための材料を与えられるでしょう。ただ直接的には、あらゆる教科の教員が、生活指導において生徒たちの話し合いによる問題解決と合意形成のために頭を悩ませます。そう考えると、こうした公民的資質を育てる課題は、教科をこえ、あらゆる教員に共有されるべき面があるといえます。具体的には教員養成課程において、哲学分野が貢献する余地があるのではないのでしょうか。

2 他教科とのかかわり (教科間の連携)

次に、教科教育の中での教科としての哲学・倫理教育を考えるなら、高校の環境として、「他教科との関係の近さ」は生かせそうです。高校は、全く異なる分野が社会、理科として束ねられ連携をとりつつ指導している。また教員同士、生徒との間のコミュニケーションが比較的密であるところから、他教科のやっていることが見えやすいという特徴をもっています。これは個別の領域にとどまらぬ問いを扱う哲学・倫理分野に有利な状況ともいえます。（資料7からわかるように）教科「倫理」のスタンダードな内容と、他の教科がからむ事柄は、あさいところから深いところまで多岐におよぶことがわかります。教科を越えた連関を積極的に授業でとりあげることで、哲学が特殊で孤立した、閉じた分野ではなく、既知のことがらをどうみるか、どうふりかえるか、というスタンスをもつこと、また教科ごと、文系、理系ときりはなされた知識観をもった生徒に、知的ネットワークのひろがりを示すことができるでしょう。

たとえば勤務校の社会科では「近代とは何か」というテーマをゆるやかに共有しているという自覚がありますし、理系とのかかわりでは、例えば大きなテーマではないですが、「ゼノンのパラドックス」のような切り口から、「変化」や「運動」をめぐる、古代哲学から数学、現代の量子力学がどのように取り組んできたかを示すことができます（この観点はサイエンスライターであるジョセフ・メイザーの同名の著作による。ジョセフ・メイザー著、松浦 俊輔訳『ゼノンのパラドクスー時間と空間をめぐる 2500年の謎』白揚社、2009年）。私自身、亀とアキレウスがについて、数学の先生たちに聞きにいった、面白いやりとりをし、授業で紹介したものです。本当は、授業の最中に、あき時間の別の教科の先生が入ってきて補足説明したりすれば大いこうけるでしょうが、クラス数が多ければ、ちょっとむずかしい。ただ講義の中にほかの教科の先生の談話を伝えることはできるでしょう。他の先生についての話題というのは、生徒は聞くものです。さらに学内ワークショップをやって、学内誌に互いにレポートを書いて教材化できればすばらしいです。うちの勤務校でも学内誌担当はその構想に結構関心はもっていますが、教員たちの忙しさ、負担の多さを考えると、実現できるかどうかわかりません。でも雑談風に話し合うだけでも、教員同士の意識も変わり、勉強熱心な先生方の哲学分野への理解や興味がひろがれば、他の授業でも言及してもらえ、よい雰囲気ができるでしょう。また現代国語や国語表現は、言葉を使って考えるという点で、哲学倫理との関連が深く、あつかうテキストによってはほとんど哲学の授業といえる実践例もあります。今回、ワークショップの準備もかねて、他教科の先生と話しをしてみても、面白かったし、授業の工夫も含めて、長期的な情報交換は必要だなと感じました。教科横断的観点を生かす余地もまだあるでしょう。

3 進路への方向づけ（大学との連携）

最後に、高校生は進路の決定時期でもあるので、その後の学びへの方向付けを考える必要があります。われわれとしては、狭義の哲学はもちろん、文系、思想系のテーマへの関心はもってもらいたいと考えて授業しています。実際、哲学科にいった学生で高校や予備校の倫理で関心をも

ったという人が多いという話もきいております。その際、できれば学問イメージのミスマッチを防ぐ工夫もしたいところです。哲学、美学、心理学で、実際の専門科目でのギャップが大きかったという話も聞きます。倫理は、思想系のさまざまな分野が詰めこまれている科目なのだから、関心による専門学科への方向づけや、分野の紹介など、進路指導的意図をもった教材があってもいいのかもしれませんが。あと、進学にかかわらず哲学に関心をもつもののために、読書案内にもっと力をいれることは、思想系出版を支える意味もあるでしょう。学問への関心の喚起という側面を強化するために、大学の研究者の方々とこのいっそうの連絡が必要でしょう。哲学の「文脈をこえていく力」を、活性化し、現代に生かすために、今後も多様な連携を通して知恵を集めていくことが求められていると思います。